その時がきた

佐藤愛子

テレビ化 10月6日放映開始
フジテレビ系 全国28局ネット

中公文庫

中公文庫

その時がきた　改版

定価はカバーに表示してあります。

1975年6月10日初版発行
1997年8月18日改版初版
1997年10月5日改版再版

著　者　佐藤愛子

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Aiko Sato

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202911-2　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

その時がきた

佐藤愛子

中央公論社

その時がきた

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一章

1

庭のバラの木という木が、ローズ色の大きな花をいっぱいに咲かせる時期が来ると、九重彰野（ここのえあきの）はいつもその庭を陰鬱だと思うのだった。

そう思うようになったのは、多分この庭の手入れが行き届かなくて荒れ始めた頃からだろう。荒れた庭にあまり沢山のバラが咲き乱れているさまは、重苦しくむしろ醜い。そのバラは彰野がこの家を美容整形外科医院に改造するために庭を壊した後に植えたものだから丁度十年になる。冬の最中に夫の明治が下肥を入れてやるだけで特別の手入れもしないのに、毎年欠かさずに大きな花をつける。今年もバラは庭いっぱいに咲き誇り、開いた花弁は外側にめくれ返って日々色褪せ、疲れ果てたように揃って下を向いているのがいかにも鬱陶しく汚ならしい。

「先生、今朝のひとがまた来ました」
婦長の松井が入って来ていった。
「先生がどうしてもして下さらないのなら、自殺するっていっています」
松井は低い、ぶっきらぼうな声を出す。五十歳の浅黒い顔に髪をひっつめにして、白い靴下と白いズックの靴をはき、いつも足音を立てずに歩いている。
彰野はまだ血に汚れた手術着を着たままで、マスクだけを外して首からぶら下げ、窓の向うの庭に向って煙草をふかしていた。彰野は今、アルバイト助手の添田慎介と二人でアメリカの女の大き過ぎる乳房の縮小手術を了えたばかりだった。
「朝から何度もいってるでしょう。ほかの医者へ行かせてちょうだい」
彰野は背中に、松井の非難するような眼差しを感じながら、煙草の煙を吐き出した。
「私は一度しないといったことは、絶対にしないのよ……」
松井は黙っていた。その沈黙の中には松井独特のネバリがある。暫く黙っていた後で松井はいった。
「福島県から来てるんです。一日遅れたらそれだけ宿賃が嵩みます。特に先生の名前を聞いて、わざわざ来たんです……」
「……」

「あの子には婚約者がいて、近いうちに結婚を……」
「それはもう五回も聞いたわ」
彰野は吐き出すようにいった。
「ヒーメンが破れてるからって、何がそんなに重大事件なのよ。どっちにしたって破るものを、なぜわざわざ作る必要があるの？」
「それは先生、あんまり邪険ないいかたです」
「だいたいね、ヒーメンが破れてるからって騒ぐような男なら結婚しない方がいいわ――その娘にそういってやりなさい」
「また先生はそんな……」
松井は彰野の手の煙草の灰の下に、大急ぎで灰皿をさし出しながらいった。
「先生、人助けじゃありませんか。待合室で泣いてるんですよ、さっきから……」
彰野は答えずに更衣室へ向って歩き出した。更衣室の手洗場で添田慎介がブラシで指の血をこすっていた。松井は彰野の後ろから灰皿を持ってついて歩きながら、へんに改まっていった。
「それでは先生、お伺いしますが、医者というものは人の苦しみを取り除いてあげるための職業じゃないんですか？　私はそう思っていましたが、違うんでしょうか」

彰野は松井の手の中の灰皿に吸殻を揉み込んだ。

「ヒーメンがなくなった苦しみ？……鼻が低い苦しみ……皺が増えた苦しみ……取るに足らぬ苦しみですよ。チャチよ。チャチすぎる。苦しみもチャチなら幸福もチャチ……」

彰野はいった。

「私はね、松井さん、自分を医者だなんて思ったことは一度もないわ。私は職人ですよ。人を救うなんてとんでもない。鞄作り、靴作りの職人と同じ。金を稼ぐことしか考えてないのよ」

「じゃあ先生」

松井は勢いづいていった。

「このことだって金儲けとして考えればいいじゃありませんか」

「職人にもプライドはあるのよ！」

彰野は急にどなった。

「靴屋だって修繕屋と靴作りとあるわ。私は修繕屋にはなりたくないのよ。まして、人の尻ヌグイなんか……もう沢山」

そういって彰野は添田慎介の方を見た。手を洗い終えた添田は、立ったまま彰野に横顔を向けて煙草をくゆらせていた。

「添田さん、どうお思いになる？」
彰野はいった。
「私のいうことはおかしい？　間違っているとお思い？」
添田はやや角ばった大きな眼を、黙って彰野に向けた。添田は何もいわなかった。添田は無口な男だ。そしていつものように、答える代りに、かすかな微笑をその眼に浮かべただけだった。

2

約百五十坪の土地に、建坪百二十の建物が建っている。もとは朝夕しか人通りのなかった住宅地の中央を新しい道路が突き切って、いつの間にやら繁華な通りになった。百二十坪の建物は、もとの家屋に増築を重ねてそうなったもので、四十年前の選びぬかれた材木と、現代の安建材とが特別の配慮もなく気ぜわしく継ぎはぎされていた。
もとの家は贅を凝らした洋風建築だった。庭を広く取り、花園を作り、ありとあらゆる植木を入れ、野生の小鳥たちの軽やかな囀りで朝が訪れ、入日は庭の一隅のくぬぎの大木の向うに沈むのだった。その頃は地坪は今の三倍以上もあった。町の地理にうとい人のためにこの家がよい目印になった。四十年前には珍しい鉄筋の総洋館で、門から玄関に通じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る左側は孟宗竹林がその洋風の建物とふしぎな調和を作り出していたものである。

だが今、そこにはブロックの殺風景な病室が道路際までいっぱいに建っていた。病室、看護婦部屋、ガレージ、医療器具薬品倉庫などである。くぬぎやけやきの林の一角は、この家を医院風に改築をするときに隣家に売却した。今そこには四階建てのマンションが建ち、幾つかの窓がこの荒れた庭を見下ろしていた。

その庭の見える手術室は、もと彰野の父筧緑堂のアトリエだった。玄関の広間だったところは診察室になった。待合室は前庭を取り壊して建て増したものだが、その上に病室を三部屋作ったので、緑堂が自慢にしていた前庭からの展望は利かなくなってしまったが、その展望も今はもう、ただごたごたと蝟集している薄汚れた建物に遮られて、ゆるやかな起伏のうちにひろがっていた武蔵野の俤はもうどこにもなかった。

彰野が九重美容整形外科医院をここに開いてから、今年で丁度、十年目である。十年前の春の夜、彰野は突然、その決心をした。その数年前に夫の明治がそれまで勤めていた都立病院の神経科医長をやめて、アルコール中毒専門の療養所を三浦半島の雨崎に作ってから、九重家の経済生活は急速に脅かされ始めた。療養所の建設に財産を投じた日から、明治は一文の収入も家へは入れなくなったのだ。

その頃、彰野は同じ都立病院に眼科の医者として勤めていた。家計を補うために、彰野

は病院が終ってから、元の眼科医長が開業した美容整形外科病院に手伝いに行った。彰野は主に二重瞼やサカマツゲの手術などをしていたが、そうしているうちに隆鼻や豊頬、皺取りなども覚えて行き、やがて彰野の手術は院長よりもいい評判を取るようになったのだった。

彰野が開業を決心したのは、都立病院の給料とそのアルバイト料だけでは追いつかぬ出費が嵩んで来たからである。明治の療養所は赤字つづきだった。明治は家に金を入れぬばかりか、療養所の維持費を家から持ち出すようになったのである。

彰野は夢中で苦境を切り抜けようとした。彼女は庭の一部を売り、その金で家を改造し、都立病院の眼科婦長であった松井に呼びかけて美容整形医院を開いた。そのとき彰野は三十四歳、松井は六つ年上の四十歳だった。

それから十年の間に、彰野は自分でも予想しなかったほど美容整形医として名の知られた女医になった。その成功のはじめは、彼女の手がけた名もなき歌手が歌謡界で急激に人気が出たことだった。その歌手の成功を見て、タレントや女優などが来るようになり、彼らの相つぐ成功が九重彰野の名を世間にひろめてくれた。

彰野の手がける眼は、それまでの、ただ絵に描いたような一律な二重瞼ではなく、それぞれに異る微妙な個性を持たせたところに独特の技倆があるといわれた。最近、熱狂的な

女性ファンがついて来はじめた歌手の荒井純二は右と左の眼の大きさがやや違う。そのや、や違うことによって荒井純二は左右同じ大きさの平凡な二重瞼であった頃よりも現代的な魅力が出て来たと評判された。彰野は荒井純二の鼻と顔の輪廓から計算して、故意にふぞろいの眼を作ったのだ。それはどの医者でも出来るというものではない。彰野独特の美的感覚が産み出したものだった。

そうした彰野の感覚は、画家であったその父から受けた血のせいだという人が少なくない。筧緑堂といえば大正から昭和にかけての洋画界の重鎮として知られている。緑堂は彰野の母春日（かすが）をモデルにして幾つかの代表作といわれる絵を残したが、中でも有名なのは「春愁」と題する春日が二十六歳のときの肖像であった。緑堂は当時芸者であった春日に想いを寄せ、やがて春日を落籍して囲い者としたさる実業家のところに日参して絵のモデルにする許しを取り、その絵の成功と同時に春日をも奪ってしまった。そういう情熱的なエピソードによって、その絵はまた更に有名になったのだった。

「彰野はおとなになったら何になる？」

緑堂は一人娘の彰野が、まだもの心つかぬ頃から、膝の上に抱き上げてはそう訊いた。

「えかきさん――」

彰野がそう答えると、彼は待ちかまえていたように嬉しそうな笑い声を上げた。彰野が

そう答えたのはそういえば父が喜んだからである。彰野の絵に対する関心はその程度のものだった。しかし彰野の画才は小学校でも女学校でも認められ、周囲の者はすべて、彰野が閨秀画家として大成する日が来ることを信じていたのだった。

その頃、緑堂のもとに出入りしている画商の中で、一番緑堂に接近し、緑堂に信頼されていたのが徳川時代からの画商の家だという九重大造だった。大造は六代目になる筈の長男の明治を画商として育て上げるために、中学生の頃から家業を手伝わせ、画家の家などにも連れ歩いていたが、殊に筧緑堂の家にはことある毎に顔を出させて家族との近接をはかっていた。大造は彰野の画才に眼をつけ、明治と彰野が結ばれることを期待したのにちがいないと人々は噂したものである。

大造の目論見通り、彰野は極めて自然に明治を愛するようになった。一人娘の彰野は、明治以外にどんな異性も知らなかったせいもある。

それは明治が第一高等学校の学生で、彰野が女学校の三年頃のことだ。大造の期待は徐々に実現して行くかに見えた。しかし大造の知らないところで、目論見は崩れつつあった。明治は画商という職業を嫌うようになっていたのだ。彼は少年らしい情熱的な口調で、彰野に向って口癖のようにこういうようになった。

「ぼくは人のふんどしで角力とるような商売はしたくないんだ。ぼくは人のために役立つ

人間になりたいんだ。人の役に立っていることを誇りとし、喜びとすることの出来るような人間になりたいんだ……」

女学生の彰野は少年明治の情熱の中に巻き込まれて行った。

「あたし、お医者さんになるわ」

ある日、突然、彰野は父に向っていった。

「だってお父さま、絵は世の中の人のどんな役に立っているのか、はっきりわからないんですもの……お医者さんと画家を比べたら、お医者さんの方が世の中に役立っているでしょう?……」

彰野は無邪気な女学生だった。

「だってお父さま、絵では人の苦しみは救えないでしょう? あたしお医者さんになるわ」

それは十七歳の彰野の、明治に対するせいいっぱいの愛情の表現だった。

3

テーブルの上に、日曜日の朝昼兼帯の食事が用意されていた。明治のためにコーンフレークと二枚のハムと生野菜が少しある。明治は夏も冬も冷たい牛乳をかけたコーンフレー

クを食べる。よく飽きないものだと家族の者は感心したり呆れたりするが、まわりのそんな反応も明治は一向に気にしない。スープ皿にコーンフレークを入れ、新聞を見ながら牛乳をかけて（それがときどき、皿の外に流れ出ていることがある）あっという間に身体の奥に流し込む。スープ皿の中のものがたとえばドッグフードだったとしても、平気ですすり込んでしまうわね、パパは……と、一人娘の毬世はいつもいう。一度、明治は家事手伝いのヒロ子が間違って出した腐った牛乳を飲んでしまったことがあった。

「ほんとうかい。気をつけておくれよ」

明治はそのとき、そういっただけだった。

五月に入って二度目の日曜日である。しかし明治が家にいるのは、五月に入ってからはじめてだった。三浦半島の雨崎にある九重断酒研究所には今、約二十人のアルコール中毒患者が入っていた。約十人の収容能力しかない療養施設に無理やりに超過人員が押し込んで来る状態にこの数年、明治は悩まされて来た。社会にアルコール中毒患者が増加している傾向と同時に、明治の採算を度外視した親身な治療が口伝えに酒毒に悩む者の間にひろがって行った結果、明治は手不足や設備の不足のために、殆ど不眠不休で働かねばならなくなったのだ。

「どうですか、向うの状態は……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com